

生き方部会

I. 研究の概要

1. 研究課題

「子どもたちが自己を見つめ、自己実現を通して地域社会の担い手を育む教育はどうあるべきか」

2. 研究内容

【第1分科会(共生のための教育)】

研究内容: お互いに思いあう心を育て、地域社会の担い手を育む教育の実践

討議の柱: アダプテッドスポーツを通じて、子どもたちの生き方に反映できる共生のための教育について

【第2分科会(コミュニケーション)】

研究内容: 自己実現を支援し、お互いを思いあい、自他の命を尊重する教育の在り方

討議の柱: 子どもたちの心を守るための教育実践について

3. 研究方法

- (1) 交流計画
研究内容領域ごとに2つの分科会に分け、各分科会で討議実践交流、意見交流を行う。
- (2) 分科会構成
 - ① 共生のための教育分科会
 - ② コミュニケーション分科会
- (3) 研究協議会の内容・方法
 - ・南北合同開催での研究協議会をもつ
 - ・今年度の会場について、ボランティア分科会は北広島市立西の里中学校、コミュニケーション分科会は北広島市立西部小学校
 - ・2つの分科会でそれぞれに実践発表や講演、レポート交流などを行う

II. 実践研究の経過と成果

1. 実践研究の経過

(1) 部会役員研修会による研究経過

日付	会議名・取り組み	内容
5月8日	第1回役員研修会	今年度の研究計画の概要確認
7月上旬	第1回課題部会事務局長研修会	この研修会を受け、役員で実践方法を検討・決定
7月	第2回役員研修会	課題部会研究協議会の打合せ
7月	部会だより No. 93, 94 配付	
8月下旬	第3回役員研修会	課題部会研究協議会の打合せ
9月2日	課題部会研究協議会	
12月上旬	第4回役員研修会	研究のまとめなど

(2) 部会役員研修会での研究成果

- ・課題が明確に迫るための手段として実践交流が必要であると考え、今年度の研究を進めることができた。
- ・事前研修を行うことで、当日の研究協議について具体的な運営方針を立てることができた。

2. 課題部会研究協議会での交流

今年度は、講師を招いての研修会とレポート交流を行うことができた。

(1) 第1分科会 共生のための教育

① 理論研修の概要

- 研究内容：こどもたちの生き方に反映できる共生のための教育について
- 講師：大山 祐太 氏（北海道教育大学岩見沢校 アダプテッド・スポーツ研究室 准教授）

[講師による講演]

第一分科会では、「共生のための教育」をテーマに「子どもたちの生き方に反映できるボランティア教育について」の講演をしていただいた。アダプテッドスポーツについて説明していただき、障がいがある人も障がいがない人も、共に楽しむことができるように、ルールや用具の工夫をすることが大切であることを教えていただいた。自分の幸せだけでなく、みんなの幸せを考えるスポーツの在り方を知ることができた。また、多様性の観点から、オリンピックの事例をあげトランスジェンダーについてグループ討議を行った。多様性について、教育現場ではどうあるべきか話し合いを通して深めることができた。学校現場で「実践してみたい。」と感じられる講演内容であった。



[演習・実技研修]

ボッチャ、吹き矢のブースを設定し、各グループに分かれて体験を行った。ただ体験するのではなく大山先生から課題を与えられそれを解決するためにみんなアイデアを出しながら行った。演習課題は、「各グループに全盲の児童が1名いる。全員が楽しめるように工夫をする。」である。全盲の体験をするためにアイマスクをし、どうしたらみんなが楽しめるのか議論していた。ボッチャ体験グループは、はじめの白い球がどこにあるのか、自分の投げたボールがどの位置に行ったのかなど見えない人もわかるように説明したり、音を出して方向を知らせたりするなど工夫していた。また、他の人のボールの位置や試合の流れを知らせるために実際にボールを触って確かめたり、手をグーにしてボールに見立て教えたりしていた。吹き矢体験グループは、的と自分の距離、的の高さ、矢を飛ばす方向を教えるために、手を叩いて音を出し方向を示したり、「もう少し右。」など言葉で伝えたりしながら目が見えない人も楽しめるように工夫をしていた。ただの体験で終わることなく、みんなで考えを出し合い議論することでより理解が深まり有意義な実技研修となった。



② レポート研修

今年度も各校からたくさんの実践レポートが集まり、交流することができた。各学校での実践（ボッチャ、モックル、風船バレー、ブラインドテニス、卓球バレーなど）が紹介され、誰もができるようにルールが工夫されていた。また、「共生」をテーマとして、地域社会の中で共生していくために身につけさせたい力や地域と連携した実践の内容もあり、いろいろな視点でレポート交流することができた。



③ 成果と課題

研修会後のアンケートでは、「講演と実技があり良かった。実際に自分が体験することで考えが深まった。」「障害の有無に関係なく楽しめるとは何か考えることができた。」「実技研修では、テーマを設定しそれを解決するためにどうしたらいいか、グループで話し合い練り合うことができてよかった。」という意見をいただきました。一方、「地域と共生の観点から内容を深めるとよかった。」という意見もあり、今年度のテーマでもある「共生」について今後考えていける研修会にしていきたい。なお、生き方部会事務局では、「ボッチャ」「モックル」の道具の用意がありますので、ぜひ各学校で活用していただきたい。

(2) 第2分科会 コミュニケーション

① 理論研修の概要

■ 研究内容：自己実現を支援し、お互いに思いあい、自他の生命を尊重する教育の在り方

■ 講師：坂本 勤 氏（詩画家、元中学校教諭）

前半は講師による講話と質疑応答、後半はレポート交流を行った。

【講師による講演】

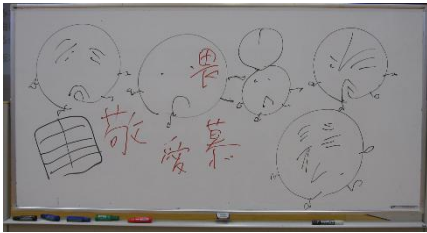
講演内容：子どもの心を守るための教育実践について

今回、『タマゴマンは中学生』の著者である坂本勤氏から、「子どもの心を守る」というテーマで講演をしていただいた。

冒頭、十勝幕別中学校を振り出しに札幌市などで勤務されていた経験をもとに、いくつかのエピソードが紹介された。体験談を語る坂本氏の言葉や表情からは、生徒を見守り続ける温かさ、自分の信念を貫く芯の強さを感じた。

著書『タマゴマンは中学生』からはいくつかの話が紹介された。「～しなサイ」と言われ続けているうちに、自分の殻にこもるようになったサイ。タマゴマン、アナゴマン、ダンゴマンが結果の芳しくない通知表を手渡した際の家の人とのやり取り。レスリング好きのイナゴマンと、技をかけられるタマゴマンとの思いの違い。

どの話もどこかで目にしたり聞いたりしたことのある光景ではあったが、見方や捉え方によっては理解の仕方にも違いがあることが分かった。



坂本氏は、講演が始まるとすぐに「敬」という文字を黒板に書いた。この「敬」が今回のテーマを考えていくためのキーワードにもなっており、子どもたちに対してどのように向き合い、どう理解していけばよいか、これからの指導や支援に向けて参考となる有意義な講演となった。



【レポート交流】

今年度は「自己肯定感を育む関わりと環境づくりに関する実践」をテーマにレポートを作成していただいた。交流会では1グループ8名程度で話し合いがもたれ、前半の講演の内容も踏まえながら自己肯定感に関する考え方や日頃の実践等について活発な話し合いが行われた。各グループの話し合いには、坂本氏も加わりながら、子どもたちの行動や考えをどう理解していくかについて、いろいろな視点で意見や感想をいただくこともできた。

② 成果と課題

研修後のアンケートには、有意義な研修で、今後の実践に生かしていきたいという声がたくさん寄せられた。講演内容については、講師の坂本氏に対する感謝の言葉の他、「心に響いた」「財産になった」「常に心に留めおきたい」など、子どもたちに対する接し方、見方、考え方など、改めて考えさせられる内容だったという感想も多かった。レポート交流は、6～8名程度の小グループが話しやすかったようで、坂本氏が各グループの話し合いに加わっていただいたことも、さらに交流を盛り上げていたようで、今回の大きな成果につながった。

今後、新たに加わった研究テーマ（「キャリア教育」「地学協働（CS）」）との関連を、生き方部会としてどう発信していくかが課題である。第2分科会としても研究内容や研究方法について検討し、次年度の計画に生かしていきたい。

Ⅲ. 部会研究の成果と課題

今年度も分科会形式を採用することで、それぞれの分科会のテーマについてより深く研究を進めることができた。また、昨年に引き続き、今年度も第1、第2分科会ともに講師に招き、理論の研修に重点を置いた研究会を計画した。研修を通し、日常的な実践を行うだけではなく、基礎となる理論を正しく理解した上で実践を重ねることが重要であるとあらためて考えることができた。

第2分科会の成果と課題にもあるが、今年度から新たに加わった「キャリア教育」と「地学協働（CS）」のテーマを生き方部会として、どのように受け止めて発信していくかを検討していくことが課題である。第1分科会の名称を、「ボランティア教育」から「共生のための教育」と改め、これまでの研究とのつながりを意識しながら取り組んできたが、次年度に向けて、さらに研究を深めて関連について発信できるように計画していきたい。

（文責 佐々木 元宏 / 小野寺 彩）